上高井教育会報

第181号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　清水　孟
編集人　会報編集委員長　小池勝雄
印刷所　須坂新聞社

着実な実践に学ぶ
～一年を振り返って～

西澤　享良

「自ら課題をもって追究し、学ぶ喜びを味わえる授業」をテーマに据えて、本教育会の最も重要な事業のひとつである研究委員会も大きな成果をおさめてきた。

各委員会とも、基礎的・基本的な内容を重視し、主体的に学ぶ喜びの持てる授業の実践をし、ひとりひとりの子どもたちの確かな力を育てることができたことと思う。

中心講師の筑波大教授谷川彰英先生には、総会における講演会で「総合学習と学びの組織化」と題してご指導をいただいた。

また、生活科の高甫小学校の授業(7／10)では、新教育課程の改定のポイントとしての「知的な気づき」にかかわって、「今日の授業には知的な気づきがあった。子どもが何をやっているかわからない授業では困る。教えるべきは教え、子どもの活動にまかせることはまかせる。一年生で体験したことが、いつ知的に結実するかわからない。本当に熱中して楽しんだりしてやっていれば、知的気づきはある。体験が大事である。」

算数数学科の東中学校の授業では、優れた授業をつくるための条件として、これまでもご指導いただいていた「教材、計画性、授業技術、構え」「参加型授業」について、本時の具体場面に寄せて指導をいただいた。「学習というものは、一つの訓練である。自分で自分を決めていく決断力や数学的な操作活動能力は繰り返させないと伸びない。繰り返すことによって、数学的な自己決定力あるいは意志決定力が培われる。本日の授業ではこの点がきめ細かく計画されていた。」

同好会については、前年度より少々加入率が下がってしまったことは、研究委員会と共に教育会の重要な事業としていることから残念である。しかし、各同好会の活動は年々充実してきている。本年度はいくつかの同好会で地域にも輪を広げて活動した。開かれた教育会として大事な試みである。

八月の講演会には、信濃デッサン館主の窪島誠一郎先生から「二つの美術館のこと」と題して、感銘深く講演を聞かせていただいた。

九月の女教師研究大会は、今日的な課題を中心に熱心な研究討議がされた。

十月の研究発表会は、三人の先生方から素晴らしい発表をいただき、日頃の研鑽の深さに触れ有意義であった。

各委嘱委員会では、それぞれの課題によせて大変なご苦労をいただいた。また、信教の各研究調査委員の先生方には本教育会の代表としてご活躍をいただいた。

会員諸先生方の積極的な参加、協力によって、本年度の各事業も多くの成果をあげて終わりを迎えようとしている。心から感謝です。

脈々と流れている上高井教育会の歴史や理念、熱き思いを大事にし、上高井教育会の一層の充実発展に向かって力強く邁進していきたい。

（常盤中）

教育会だより

1・18　第2回研究委員会世話係・委員長会
1・21　第2回同好会世話係会長会
1・26　研究小委員会
2・2　第7回常任委員会
2・9　第7回代議員会
2・17　第8回常任委員会
2・25　第8回代議員会・委嘱委員会事業報告
2・25　上高井教育会報第181号発行
3・15　上高井教育会誌第55号発刊

本校の中核活動③

知ろう！・創ろう！・ふるさとを
―栃の子パラダイス―

小山小学校

子どもたちの心の中に、豊かなふるさとができることを願って、十二月六日、栃の子パラダイスが始まりました。廊下からは威勢のいい六年生のおみこしの声が響いてきます。各会場では、アルバム作り、昔の遊び、たくわんづけ等々、各クラスらしい特色ある活動が行われました。

本校は、本年度「ひまわり子ファミリー事業」の指定校として、学校全体としてはもちろん、学校PTAとしても、地域を知り、地域の人々とふれあう活動に親子共々取り組んでいこうということになりました。はじめは、何をやったらいいのか、全くわからない手探りのスタートでした。

三年生の我がクラスは、「ふるさとかるた作り」に挑戦することにしました。自分の家のまわりの名所のかるたと方言かるたの二種類、一人四枚ずつ、四切り画用紙大のジャンボかるたを作ります。

まず最初は読み札作り。夏休みの親子での課題です。家族で考えたり、祖父母に聞きに行ったりと、家族みんなで作り上げました。そして絵札作り。やっと完成です。

「准胝(じゅんでい)観音。子どもの神様、桜の下でお祭りだ。」

完成したところで、もう一工夫。一枚ずつ写真におさめて大きな地図にはりました。それを嬉しそうに真剣に見つめる子どもたちでした。

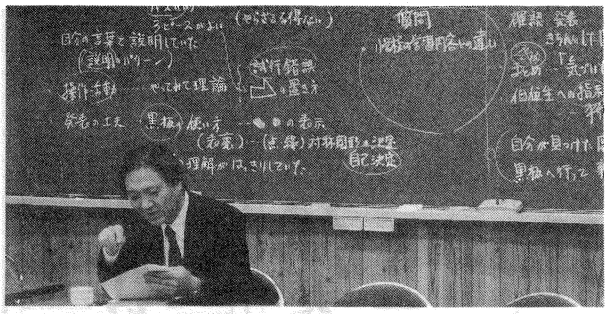
栃の子パラダイス当日。我がクラスは、ジャンボかるたとりです。教室いっぱいに広げられたかるた。だんだんスピードの勝負になってきました。お家の方も負けていません。すべりこんでくる人もいました。寒さを吹きとばす楽しい一時となりました。

この活動の中で、お家の方々のアイディアと協力が光りました。ずくを出さなければいけない事もありました。しかし、よりよいものを作ろうと一生懸命考え進めて下さいました。そんなお家の方々の姿が、子どもたちの輝きにつながったと思っています。

（百瀬美千代）

中心講師谷川彰英先生を招いての郡算数数学科研究会

算数数学委員長　宮下正満



本年度は、「子どもが自ら数理を追究し、わかり、喜びのもてる授業はどのようにしたらよいか」を研究テーマに、場面設定のあり方、課題の持たせ方、追究のさせ方を中心に据えて、どう授業を展開していくか、その解明に迫った。特に、本年度は中心講師谷川彰英先生を招いての研究実践授業となった。

東中学校一学年、単元「平面図形」、授業者嶋田秀樹先生の研究授業。3つに切った五角形をしきつめ直して「対称な図形」をつくる場面で、自分でつくった対称な図形が点対称か線対称かを判断するために、対称な軸や回転の中心の位置を決め出す学習である。

授業は、落ち着いた雰囲気の中できびきびとした子ども達が、①操作活動により一人一人が自分の能力に合わせて時間一杯意欲的に取り組むことが出来たこと。②重なり合う点をはっきりとさせたことで、対称の軸や回転の中心の位置を自分なりに決め出すことが出来たこと。③教材研究の深さ、板書の工夫、移動黒板の活用…などが丁寧でしかも細かな配慮がなされた授業展開であったこと。④既習事項を使っての共同追究での発表の仕方が工夫されていたことなど、子ども達が自分の力で追究し解決できた喜びを感得することができた授業であった。

さらに、中心講師谷川彰英先生の司会のもと行われた参加型の授業研究会、また、「授業展開の方法」「参加型授業」「総合学習」など算数数学科の枠を越えた谷川先生のご指導は会員の先生方にも大変好評でした。

このご指導を元に、本年度の研究を継続し、さらに深めて今後も進めていきたいと思います。

（東　中）

初任研を振り返って

山田こずみ

「初任者」ということで、研修を受ける機会を数多く得られたことを嬉しく思っています。振り返ると、三つの成果があったように思います。

まず、自分から求めただけでは体験できないような、充実した内容を学べたことです。上高井地区初任研で特に印象に残ったのは、「環境教育と理科教育」の倉田稔先生による研修でした。最初に先生は「環境教育をする前に、自分の環境を整えなさい。」とおっしゃいました。それは、良い食生活で健康を保つことです。さもないと、いくら若くても人に対して温かみをもって接することができない、と言われ、教師の仕事の重さを改めて認識することになりました。

その後、仁礼小学区の宇原川の上流でカワゲラやヘビトンボのヤゴ（孫太郎虫）を採集するなど楽しい研修がありました。私達は今まで気づかなかったたくさんの生物に興奮し、大騒ぎでした。後で、私達の歓声は子ども達と何ら変わりのない単純なものだったことが判明しましたが……。私は生物たちと出逢えたことと同時に、学区内にこれほど恵まれた自然があることを知れた喜びで一杯になりました。ますます仁礼が好きになり、地域の中で子ども達を育てていきたいと思いました。

二つ目は、たくさんの先生方の素晴らしさにふれることができたことです。倉田先生は植物の名の由来や仕組みについて、まるで泉がわくように多くのことを教えて下さり、学ぶ楽しさを感じました。子ども達にこのような気持ちになってもらえるようになりたいです。

また、校内では指導教官の春日山先生をはじめとした多くの先生方の授業を参観したり、お話をする中で、研究の深さやお人柄に感銘を受けました。

そして、上高井初任者の六人の仲間にも目標としたいと思うことが多くありました。優しさや明るさ、大らかさ、毅然とした態度など。今までの十ヶ月間で、これからもつきあっていけるような仲間ができたことは、私の宝です。

三つ目として、これらの恵まれた環境で、自分のやり方が少しでも見えてきたように思います。今は学級児童の対応に悩む日々ですが、教職についてこの子達と出逢えたことを幸せに思い、元気に笑顔でやっていきたいです。これからもよろしくお願いします。

（仁礼小）

信教特殊研究

須坂市の商業の変容

牛山通高

地方小都市における商業集積（商店が連続している・集中している）は、その都市の成立要因や特徴に深く関係をもち、その都市の地域性を顕著にあらわしていた。須坂市は谷街道の辻の町として商業が集積し発展した都市である。明治・大正期には、扇状地の畑と周辺の農村の労働力を吸収して製糸の町として発展した。第二次世界対戦後、製糸業から精密機械へ中心産業が転換した。江戸時代から高度経済成長期にかけて発展した地域が重なっていたために須坂市の商業集積は、市の中心部に集中し、商店街としての活動が活発に行われてきた。

須坂市における商店数（小売業）は、一九六六年では九二一店舗であった。一九八〇年代までは、ほぼ同じ水準であったが、一九九八年には七八五と激減した。

須坂市においては、高度経済成長期に、所得の増加、モータリゼーションの進展、市の周辺部への宅地造成が重なって、人口が中心部から周辺部へスプロール化した。この間商店街の各店舗は、ショッピングセンターへのテナント出店、交通量の多い道路沿いへの移動など立地移動によって経営を維持した。立地移動をしない店舗は、スパーをはじめとしたチェーン店化や周辺観光地への配達、周辺市町村への訪問販売などで商店街に店舗を残しながら経営を続けてきた。それが、この十年で百の店舗数減少となったのである。

大量の資本金と地価の高騰によって生まれたバブル経済の地元商店に与えた影響とはどのようなものであったのか。消費者の買い物動向を見ると次の二つの変化が見られる。一つは、巨大な資本を背景に薄利多売を展開するディスカウントショップである。日用雑貨のみでなく、電気機器、衣料品、薬など全国チェーン店が市内・長野市郊外に進出し消費者を集めている。もう一つは、コンビニエンス・ストアーである。市内には、十五の店舗がある。人口比の店舗数は、長野市と同率である。市内の単独世帯は一五％を越え、三人世帯になると五八％以上である。近所で買うものの代表とされた飲食料品では少人数家族が増える中、コンビニエンス・ストアーに消費者の足が向いている。

地価高騰と大資本のチェーン店進出が続いたバブル期、市中心部の商店は競争力を弱められ、商店街は断列が見られるようになり、百の店舗数減となったのである。

（須坂小）

身近な環境教育

堀田　幸雄

中教審の答申でも「環境教育」について一項目をおいて述べています。

エネルギー教育や環境教育は二十一世紀を生きていく子どもたちにとってとても重要な教育になっていきます。

石油に代わるエネルギー問題・ゴミ問題・ゴミを処理するときに発生するダイオキシン・環境ホルモンなど考えれば考えるほど、早急に対応しなければいけない問題ばかりです。

これからのことを考えると解決の方法が明確ではありません。

そこで、もっとエネルギー・環境問題を前向きに考えられるものはないかと考えてみたのです。

生ゴミを堆肥にして、作物を育てる実践を知りました。

これは、琉球大学比嘉先生が提案した生ゴミをEM（有用微生物群）を利用したボカシを入れ、ボカシあえを作ります。ボカシあえを土に混ぜて、土を活性化させるものです。

私がおこなった実践を紹介します。

○用意するもの

EM容器・EMぼかし（ディスカウントショップなどで売っています。）

○やり方

給食で食べきれなかったおかず、みかんなどの皮、リンゴの芯、残ったパンやご飯をEM容器に入れます。生ゴミとなるものはすべて入れました。汁物は流しに置いた三角コーナーで水分を取ってから容器に入れました。

その上にカップ一杯のEMぼかしを入れ、よくかき混ぜます。その上に置きぶたをします。

空気が入らないように、きちんとふたをします。

EMボカシによって生ゴミが発酵します。このとき、発酵液が出るので、毎日のように下のコックから液を出しておきます。

容器が生ゴミで一杯になったら、直射日光の当たらない所で一～二週間置いておきます。

一～二週間過ぎたら、ふたをあけてみて、ヌカ漬のような発酵臭になれば、EM生ボカシ堆肥の成功です。ボカシあえができます。

この臭いは、慣れないと「くさい」と感じます。子どもたちもはじめは「くさい。」と言ってとまどいます。

「ヌカ漬けのにおいだよ。」と教えると、だんだん子どもたちは臭いに慣れます。

このEM生ゴミ堆肥を土の中に入れます。夏だと一週間で、堆肥も土にもどってしまいます。この実践をやっていくと、子どもは生ゴミの始末に関心を持ってきます。

（森上小）

大学院の研修から
～研究発表によせて～

黒岩　和男

本年度上高井教育会研究発表の機会が与えられ、テーマ「亜高山針葉樹林の構造と更新に関する研究」について発表させていただきました。今回は、この研究の思い出について述べたいと思います。

大学院の研修は、私の在籍した理科教育専修課程では、「現代教育学」、「現代教育心理学」「理科教育総論」が必修の授業で、他に「理科授業研究」「理科教育特別研究（修士論文）」も必修です。

また、理科関係の授業もいくつか選択し、合計で三十単位以上履修しなければなりません。この理科関係の授業が結構大変だったと思います。

しかし、一番大変だったのは修士論文を書くことでした。今まで論文なんて書いたことのない私にとって、百枚くらいの原稿を書くことに随分抵抗がありました。私は、志賀高原の北西山麓にある「おたの申す平」と呼ばれる原生林をフィールドにし、二年間に約七十日間調査しました。この亜高山針葉樹林の構造を解明し、修士論文にまとめようとしました。はじめてこの原生林に足を踏み入れたとき、映画「もののけ姫」にでてくるような、テレビで見た「白神山地」のような森林を志賀高原で見ることができたことに深く感動しました。この森林には、樹高二十mを越える大径木もあれば一m足らずの幼木、そして林床には二十cmくらいの実生が数多くあります。また命を終えて倒木になった樹木も二百本くらい横たわり、その上にはコケが生い茂っています。

いざ調査にはいると、調査地は起伏のある大地で、そこにある四百本近くの樹木の高さ、幹周囲、分布位置を計測するのは困難でした。更に人ひとりいない原生林の中で、一日調査することは孤独との戦いでもありました。その調査が終わり森林構造の解析に入りました。四百本近い樹木の解析にもだいぶ時間がかかり、コンピュータの力なしには到底できなかったことです。満足のいくまとめはできなかったが、何とか論文にまとめることができました。

最後になりましたが、中学校に配属された今、生徒にも森や森林の仕組みに関心を持ってもらいたいとの願いで、授業や選択の時間に実践をしていきたいと思っています。

また以前に比べ、山や森に行く機会が増え、樹木に関心を持つことができたことを嬉しく思っています。

（小布施中）

本校の宝㉕

本校の宝

日滝小学校

日滝小学校の校門右側の庭園内に、大きな石碑がある。高さ二㍍、幅一㍍半程の大きさである。児童や職員、保護者、地域の方等が校門を通る度に眼に付く位置にあり、多くの人たちに親しまれている。

この石碑に刻まれた「徳潤身」の言葉は、明治六年に創設された「潤身学校」に由来する。この年創設された上高井の小学校は二十番から三十九番まであり、その中で本校の潤身学校は、三十五番校に指定されている。

（上高井郡誌より）

明治七年二月二十七日大谷の日滝寺に設立された潤身学校の時から現在に至るまでこの「徳潤身」の精神が受け継がれてきたことは、昭和五十五年の校舎移転時に石碑が建てられたことからも分かる。

富潤屋
徳潤身
心広体胖
故君子必誠其意

この「潤身」は、中国の古典、四書の一つ、「大学」といわれる書物からとったもののようである。

「富潤屋。徳潤身。心広体胖。故君子必誠其意。」

富は屋を潤し、徳は身を潤す。心広ければ、体胖なり。故に君子は其の意を誠にす。

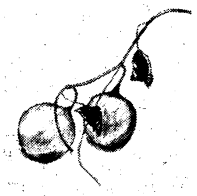
財産ができると、家屋もその恩沢をうけるように、徳ができると人の体もその潤いをうける。心が公明正大であると、肉体もおおらかである。そこで君子は、必ずその意念を真実にするのである。（筑摩世界大系5「論語、孟子、大学、中庸」金谷治訳）

明治の初め創設された各地の学校には、中国の書物から言葉を選び命名している例が多いということである。「潤身」も、おそらく「徳ハ身ヲ潤ス」ということで、新しい学校教育の願いとしたことが推測される。

この「徳潤身」の理念が本校の宝として継承されてきたことを深く想いをいたし、誠実に心を広く持って日々の教育に従事したいものだと、改めて感じたところである。

（斉藤義男）

火ばち談義



高山小　市川哲男

だれが、何のために

北澤　英和

「かつて子どもだったことを忘れずにいるおとなはいくらもいない。」サン＝テグジュペリの『星の王子さま』と、「皆さんの子どもの頃を決して忘れないでと。約束してくれますか。誓って。」エーリッヒ＝ケストナーの『飛ぶ教室』を偶然に続けて読んだ。二つの本で語っている「子どものときの自分を忘れない」をだれかが私に説教でもするかのように。

私の子どもの頃は学校の勉強以外すべてのことが楽しかった。目には見えない物を仲間と共有できた。基地を作ってだれかが「敵が来たぞ。」と言うと見えるように敵が現れ、「基地が半分やられた。」「火が出た。」「自動消火ボタンだ。」「ひみつ兵器を使おう。」「一回しかつかえない。」五、六人の仲間が一瞬にストーリを共有できた。森が海になり、土が火になり。目に見えない物をつくり出す力とそれを見られる心の目をもっていた。

一方、学校では、窓の外と教室の時計を見て、いつも終わりのチャイムをまっていた。

自分のクラスの子どもたちはどうなのであろうか。

私が大学で「みなさんは現代教育の成功者だとして、そのあなたがたが受けた教育をふり返ってどうでしょうか。つまらなかったり、よく覚えていなかったりしたら、それは何かがまちがっているはずです。それをどうにかしていくのがあなたがたの教師としての仕事です。」と言われたのを思い出した。

二つの本の偶然は、このことをきちんとしているのかといいたかったのであろうか。

ちょうど二つの本を読んだころに娘が生まれた。二ヶ月の娘は言葉をもたないが気持ちを表現している。「心の目で見なくちゃ物事はよく見えないってことさ。肝心なことは目に見えないんだよ。」

心を磨くために、娘から学び、子ども達から学び、子どもだった頃のことを忘れずにいる大人になっていきたい。

（日野小）

日本刀に寄せて

小口　俊幸

居合をやっているので、日本刀を手にします。居合ではそれを始める前に、刀礼といって刀に対して礼をします。終わりにも礼をします。

日本刀はとてもよく切れます。切先という刀の先端がいちばんよく切れます。ちょっと当たっただけで、ガバッと切れます。だからいい加減な気持ちで刀をぬいたり、納めたりはできません。

そんなこともあって、刀礼には無事を祈る気持ちも込められています。

居合をして、日本刀を構えるとき、日本刀に対して特別な感情がわいてきます。日本刀は人を傷付ける人切り包丁ではなく、精神を鍛えてくれるものと思うのです。

この思いは、刀に直接触れることができた、江戸時代以前にはだれでも感じていたのではないかと思うのです。

そんな日本刀ですが、日本刀で人を傷付けるような事件が現在でも起きています。あってはならないことです。こういう報道を聞くと残念でたまりません。そして、日本刀に触れる機会のない人にとっては日本刀は恐いものだということをいっそう深めることと思うと、かえすがえす残念です。

しかし、日本刀は手にした人の精神世界に影響を与え、日本の文化にも影響を与えてきています。

「しのぎをけずる」「鍛練」などの言葉は、日本刀から生まれた言葉です。

しのぎをというのは鎬と書きます。刀を横から見るとでっぱっている部分です。剣道で言うつばぜり合いのとき、鎬に刃が当たります。激しい攻防の様子を言っているのが「しのぎをけずる」なのです。

日本刀は鍛練すればするほど固くしまり、刃紋といって複雑な縞文様が刃に生まれてきます。「鍛練」にも精神的な意味がこもっています。

こういう言葉は他にもたくさんあります。

日本刀を振っていると、そんな感情を再認識したりします。モノとしての日本刀もすごいですが、文化として広まっている日本刀も大切です。

（豊丘小）

カウンセリングの研修を通して学んだこと

藤森　明美

今年、私はカウンセリングⅢ―ABCという延べ六日間の講座を受けた。私は、自分が知らない自分をのぞいてみたい、くらいの気楽な気持ちでこの講座に初めて申し込んだが、人気が高いそうで、選ばれた三十人と言われ、ラッキーだったらしい。

この研修で何度もコミュニケーションづくりの場面を簡単なゲームやスキンシップを通して行ったが、他人を受け入れるということ、自分は受け入れてもらえていると感じられるようになることは、目に見えない、又は目に見える形の壁を崩していく（壁を崩すというより、壁にいくつかの穴をあけお互いに行き来できる部分を増やしていくこと……とでも言った方がいいかも）ことであると思った。

あと印象的だったのは、五、六人のグループで一人を外に出し、他の人は肩を組んで中に絶対に入れさせない、逆に組んだ中から一人が外に出ようとするのを出させないゲーム？をやった。これらは、グループに入れまいとするいじめの状態と、一度入ったら簡単に抜け出せない状態を体験できた。どの立場になってもそこにはまってしまう怖さを感じた。

この六日間の研修で、非構成的グループ・エンカウンター、フィンガーペインティング、バウム療法、アロマ・セラピー、箱庭療法、ロールプレイング、ペルソナづくり、エゴグラム等講義よりも演習が中心の研修で、どれも初めての内容だったので、新鮮で印象深いものになった。また、講師の先生方がそれぞれに魅力的な方ばかりだったので、チャンスがあればまた是非話を聞きたいと思っている。

この研修で少しわかった自分は、こんな所で恥ずかしがったり、意外と大胆に行動できたり、こうされると気持ちよく感じたり、苦しくなったりするのだな……ということだった。研修だからではなく、こういう自分の気持ちを感じながら生活していくことは、生徒指導のためだけではなく、職場や家族、周囲との人間関係を円滑にしていくのにとても大切なことであると実感できた。

（高山中）

編集後記

晴れた日には、遠くアルプスの峰々が白く輝き、たいへん美しい季節です。一方、寒さが厳しくなり、体調をくずした方もいらっしゃるのではないでしょうか。

いよいよ、平成十年度もおしつまってきました。体調をととのえて、一年間のまとめにのぞみましょう。

本号では「一年を振り返って」を中心に、研究・研修報告を含めて編集させていただきました。お忙しい中、原稿をお寄せくださった先生方、本当にありがとうございました。（佐藤・柳原）